

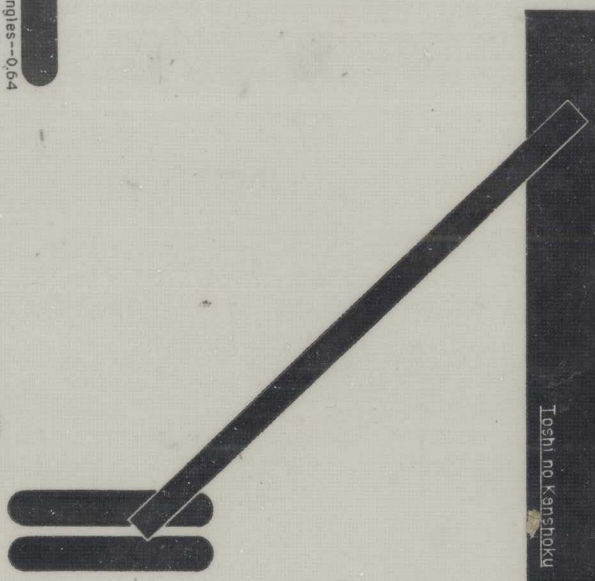
mochiron natbu no kosjou to mettaku en o kitta wake dewe naku, itaoba zoukikanaku wa  
 imamo ikubun miderana shikata de tsujiotte  
 iru choukou ga akirakaderedomo, kyusoku ni koubutsuke shi shiroku nari chusyouke suru  
 Bo nendai no tokyo no sonzai kanaku wa, jika ni hone ni semeru.

# 都市の感触

Toshu no Kanshoku

Keizou Hino

三 啓 野 日  
 K E I Z O H I N O



Roundcorner Rectangles--0.64



Roundcorner Rectangles--0.48



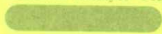
Roundcorner Rectangles--0.72



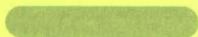
Roundcorner Rectangles--0.45



Roundcorner Rectangles--0.72



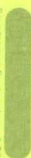
Roundcorner Rectangles--0.72



都市の感  
触  
日野啓三

講談社

Roundcorner Rectangles--0.72



## 都市の感触

昭和63年2月25日 第1刷発行

著者 日野啓三

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二／郵便番号一二二  
電話東京(〇三)九四五―二二二(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 一四〇〇円



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてお送りください。  
送料小社負担にてお取替いたします。なお、この本に  
ついてのお問合せは、文芸図書第一出版部あてにお願い  
いたします。

© Kenzo Hino 1988 Printed in Japan

日野啓三<sup>ひのけいぞう</sup> 昭和4年東京に生まれる。東京大学  
社会学科卒。読売新聞記者として、ソウル、サイ  
ゴンに常駐。昭和50年、『あの夕陽』(集英社文庫  
所収)を発表し芥川賞受賞。さらに、『抱擁』(集  
英社刊)で泉鏡花賞、『砂丘が動くように』(中央  
公論社刊)で谷崎潤一郎賞をそれぞれ受賞した。  
代表作に『夢の島』(昭和60年度芸術選奨文部大  
臣賞受賞・講談社刊)、『夢を走る』(中公文庫所  
収)等がある。

## 目次

|           |     |
|-----------|-----|
| 地下のしみ     | 7   |
| 白と黒       | 21  |
| 閉じこめられて   | 41  |
| 亀裂よ走れ     | 61  |
| 見えない時代    | 81  |
| 日常という夢    | 101 |
| ビューアーズ・ハイ | 117 |

においのない風景

135

ニュートラルな音

155

めぐるもの

173

新しい連関

191

イルカは跳んだ

209

あとがき

226

装幀 戸田ツトム

# 都市の感触





# 地下のしみ

一九七〇年代の末に男は新宿区から皇居に近い千代田区のマンションに移って、その後約六年間住んだ。

マンションの部屋は玄関から入ると二階だが、敷地が斜めになっているので、ベランダの下はすぐ地面だった。まわりはぐると高層ビルとマンションで、部屋の中に日がさしこむのは冬の正午前後の三十分だけ。男が書斎にした部屋は、前がすぐ隣のマンションのベランダなので、窓はすりガラス。眺望はゼロ。居間から見えるのもコンクリート塀のむき出しの灰色の表面だけである。実質的には地下室に近い。

さらにマンションの玄関から三十メートル先に地下鉄の出入口ができた。男は大手町の新聞社に通っていた。新聞社は地下鉄の駅の真上にあった。男はマンション前から地下に

降り、地下から新聞社のビルに直接上がった。

一九八〇年代の前半、男は「地下に潜った」ことになる。

マンション前の地下鉄の駅は、彼ら一家が移ってきて間もなく開通した。

新しい駅は通路の床も壁も天井も真新しく、乗降客が多くないので、汚れることもなかった。少し夜遅くなると、長く広く真直な通路は蛍光灯の照明だけがむらなく光って、人影なく静まり返っている。夏でも明るいだけの空虚が肌にひやりとした。

自分の靴音だけが反響する。

そういう場所で、男はなぜか気分が浮き浮きして弾んだ。自分の身体も消えて透きとおって、意識だけが張りつめる。息苦しくではなく、開かれて緊張する。

かすかに青っぽい蛍光灯の光みたいだ、と自分を感じる。進化とは鉱物が光になるプロセスではあるまいか、と考えたりする。有機的生命体の段階はその中間の、ちょっと重ったるいささやかなエピソードに過ぎない……。

地上でも、男が住んでいる間に、通りに沿った古い木造の商店が次々と高層マンション

に建ちかわり、通りの両側はコンクリートあるいはタイルあるいは煉瓦肌の、そそり立つ固い壁になった。

空が狭くなり、雲が遠くなった。地表も地下のようになった。

街灯の人工光線が明るくなった。街灯に照らされると、排気ガスで薄汚れた街路樹の葉並、鮮やかな緑を取り戻して生き返ることを発見した。

小さな子供のときから、男は自分が冷たく透明な気体の薄い膜に包まれているような気がしてきた。それは必ずしも他人（肉親を含む）との間にだけあるのではなかった。都会ではない小さな町や農村にも短い間住んだことがあったが、風景もつねに気層に隔てられていた。

その透明な繭のような気層が、この時期、急に街じゅうにひろがった、と男は感じた。大きく息が出来る気になった。

地下鉄の駅はたいいてい長い通路がある。とくに男が乗り換える駅の連絡通路は長かった。男はかつて春先の土手の道を歩いたときより、のびのびと弾んだ気分、長い地下通路の幾つもの曲がり角を曲がり、エスカレーターに乗った。

“地下”は土の中ではなかった。母なる大地の暖いふところではなかった。コンクリートと金属と真空の世界だった。

それが男にとって、一九八〇年代の前半だった。

季節がいつだったか記憶はない（地下的世界に季節も天候の変化もないから）、ある日、男は地下鉄のホームに立って電車を待っていた。

ホームは通路よりもさらにまた一段下の世界である。

ホームは巨大な円管の内部にある。ホームから眺めると、線路わきの壁も、頭上の天井も彎曲している。男は地下鉄の工法を知らないが、継ぎ目から想像すると、大きなコンクリートの環を次々につなぎ合わせたように見える。

ホームの端近くに立ってぼんやり線路の方を眺めていた男の、ちょうど真前に、チューブの継ぎ目があった。ぴったりとうまく厳重に閉じている。それから継ぎ目に沿って、視線をゆっくりと上の方に上げていった。

そこで男は出会ったのである。

しみ。

男の目から斜め上あたりの部分で、継ぎ目から水が滲み出ていた。いま滲み出ては溜って滴になって落ちかけているのではない。液体そのものは見えなかった。見えるのは、しみ、つまり継ぎ目の一箇所のまわり十数センチほどの広さにわたって、コンクリートが濡れているそのひろがりである。

まだほとんど汚れていない灰白色のコンクリートの、彎曲した内壁面のその部分だけが、丸く暗灰色になっている。そうではなかった。形は正確に丸くはなかった。色も一様な暗灰色ではなかった。

一番外側は濡れたコンクリートの色だが、その内側に黒っぽい部分があり、さらにその内側で何かが付着したような凝固しかけた艶ツヤっぽい乳白色の縞模様がまじり、一番中心のところは真黒なものが盛り上がりかけていた。そしてその何重もの同心円の形のどれもが、見事に歪いびつなだった。

男の視線が吸い寄せられたのは、一見何でもない漏水のしみが、複雑な形と色をしていることだった。恐らくその成分も単純ではないだろう。

何よりもまず、男は美しい、と思った。アンフォルメル絵だと思った。両手の親指と人さし指で宙に四角形をつくり、その額縁の中に不定形のかたちをおさめてみた。

灰白色の地の上に暗灰色から黒へと濃くなってゆく色調の微妙な変化。黒もこまかな部分によって、淡い黒と濃い黒、暖い黒と冷たい黒の無限の移行がある。その間に油絵具をチューブからしぼり出して塗りつけたように、光沢のある白っぽい盛り上がり。もちろんその白も、幾分茶色っぽく、かすかに緑を含み、黒もまじりこんでいる多彩な色だ。

それ以上に、形の優美な崩れに、男は魅了された。牡蠣<sup>かき</sup>を連想した。海中の岩から剥がしたばかりの、まだ生きてうごめいている牡蠣。粘液に濡れた幾重もの襞<sup>ひだ</sup>。燐光をひめたように内側からぬらついて光る濃厚な白。黒がまじる。

絵というよりオブジェ。しかもうごめくオブジェ。自分でひとりでにじわにわと。

男は敗戦直後の食糧難の時期に少年だった。身体のうちこちに腫物ができた。とくに内腿の皮膚の柔いところにできたものが大きかった。直径三センチから四センチにもひろがって膨れた。普通の膿<sup>うみ</sup>みものと違っていた。中に膿<sup>うみ</sup>がたまるのではなく、皮膚も肉も体液



も一緒になって崩れて溶けた。透明な液が何十日もにじみ出た。指先につけてなめたら、酸っぱかった。

腫物ができた、というより、何匹もの奇態な生きものがとりついたように思った。あるいは自分の身体が少しずつ別の生きものに変わり始めたようにも思えた。とくに夜、空腹で眠れぬ夜に、その生きものたちもぞと動いた。慢性の栄養失調でぐったりしている身体の中で、その生きものたちだけが生き生きと元気だった。

坐りこんで内腿をそっとのぞきこみながら、この目もなく鼻もなく手足もなく、全体が歯のない口のような生きものに変わってしまうのも悪いことではない、とも思った。多分こいつは食べることしか考えない。まるでこのぼくより本当のぼくみたいだ……。

すっかり忘れていたそんなことを、男は思い出した。

そんな気味悪い腫物のような自分の正体を隠すために、透明な気層の膜をかぶったのかもしれない。自分の中には、気を許すと崩れた人面痘のような形で現れてしまうヘンにまなましいものがある、という感覚を、男はずっと持ち続けてきたことも、思い返した。

地下鉄の壁のしみは、視覚的な美しさから次第に皮膚感覚に迫ってきた。ひとりでにじ